

聖書:使徒の働き26章8~23節

説教:わたしは、あなたが迫害しているイエスである

はじめに

主の復活を覚えるイースター礼拝に臨んでおります。死んだ者がよみがえるという話しは、映画やファンタジーの世界の話で、現実にはそんなことはありませんと、世のほとんど方は考えています。では私たちはどうか。主の十字架による罪からの救いは信じられる。けれども死からのよみがえりについては、まことに心許ない。私もかつてそうでしたが、おそらくそういう方は少なくない。

ではパウロはどうだったのか。これから詳しく見ていきますが、パウロはキリストの復活はまったく信じていなかったし、それどころか教会を迫害していた人です。ところが、後にイエス・キリストの死と復活を宣べ伝えることになる。そこにどんなことが起きていたのか。パウロの証言に耳を傾けてまいります。

## 1 背景

### 1) ユダヤ人から訴えられる

きょうの箇所に入る前に、ここに到るまでの経緯を説明しておきます。パウロは三回の伝道旅行をしたと言われています。その三回目の旅行が終わりパウロがエルサレムの神殿の中にいると、あるユダヤ人がパウロを見つけ、「この男は律法に逆らうことを教えているばかりでなく、異邦人を宮の中に連れ込んで神聖な場所を汚している」と叫び、それを聞いた人々がパウロを捕まえようと殺到して大騒ぎになる。それで治安警備に当たっていたローマ軍が出動し、パウロを逮捕してむち打ちにしようとする。そのときパウロはこう言った。「ローマの市民である者を、裁判にかけずに、むちで打つてよいのですか。」(22章25節)これを聞いた千人隊長はびっくりして、ただちにパウロの鎖を解き、ローマに身柄を送って裁判を受けさせることにする。パウロが切り札として持ちだした「ローマ市民権」とは何か。たとえばパスポートというものがあります。外国では「この人は日本国の国民です」という証明にはなりますが、その国で犯罪を犯せば基本的にはその国の法律でさばかれます。ところがローマ市民権は、外国で犯した犯罪であっても裁判はローマで受けられる。そんな特権的な力を持っていた。

### 2) 総督フェストゥス、アグリッパ王

それでパウロはローマに送られる前に、当時のローマ総督であったフェストゥスのもとで取り調べを受け、いわゆる予備裁判が開かれることになり、そこへイスラエルの王であったアグリッパ王も同席していた。これが今日の箇所の背景です。

## 2 パウロの証し

### 1) イエスの名に対して徹底的に反対していた

この二人の前でパウロが語ったことの要点は三つあります。

一つ目。彼は外国に住むユダヤ人の裕福な家庭に生まれ、ユダヤ教のなかでももっとも厳しく律法を守るグループであるパリサイ派の若きリーダーとなったのですが、そのときパウロがしたことが9, 10節にある。「実は私自身も、ナザレ人イエスの名に対して、徹底して反対すべきであると考えていました。そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を受けた私は、多くの聖徒たちを牢に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の票を投じました。」

こうしてクリスチャンを探し出しては牢に投げ入れ、拷問のようなことまでやっていた。こんなことをしていたわけですから、クリスチャンの間でパウロの名前を知らない者はおらず、後に彼が回心して教会に行こうとしたときは、みな恐れてパウロを教会に入れようとしなかったほどだった。これが一つ目。

### 2) イエスの声を聞く

#### ①幻覚か?

二つ目。そんなパウロが、クリスチャンを捕まえるためにダマスコという外国の町に向かっていったとき、太陽よりも明るく輝く光を受けて突然地面に倒れるという事件が起きる。しばらく立ち上がれないまましていると、天から声が聞こえる。パウロが「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」との答え。

パウロはこれを聞いて戸惑った。イエスという名は憎き仇の名前。そのイエス本人が語っているという。でも、イエスはどくろと呼ばれる丘で十字架につけられて殺されたはずではないか。クリスチャンたちがイエスを救い主メシアだと言い、イエスが三日目に墓からよみがえったと言っている

けれど、それらは全部嘘に決まっている。人を惑わすことを言いふらすクリスチャンは徹底的に取り締まらなければならない。そんな使命感に燃えて、いままでがんばってきたのです。

ところが今パウロははっきりと「わたしはイエスである」と語る声を聞いてしまった。最近、随分と張り切っていたのできつとその疲れが出てありもしないことが見えたり聞こえただけだろうか。いや、これは嘘や幻覚ではない。す今確かに主の語りかけを聞いたと即座に受けとめた。なぜそうできたか。

## ②神に出会ったモーセの例

ここでモーセのことを思い起こしてみましょう。彼もパウロと同じように、名前を呼ばれて神の声を聞いた人ですが、そのときのことが出エジプト記3章5節にあります。「ここに近づいてはならない。あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。」確かにここに聖い方がおられるという感覚、これは気のせいだという話しではないのです。自分の罪があぶり出され、このままでは死ぬのではないかとさえ思うほど苦しくなる。聖書の預言者たちが神に出会った時、みな口をそろえて言っています。モーセもそういう経験をしながら、主のみことばに従って行く決心をしていった。

パウロもそうだったと思うのです。主は言われました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」神を迫害していたという罪が突き刺さってきて、パウロは何も言うことができない。神の聖い臨在がぐいぐいと迫ってきて逃れられません。主イエスはいまよみがえられて生きていることは、もう否定のしようがない事実と受けとめます。

## 3) イエスの死と復活を宣べ伝えている

それで彼はどうなったか。それがパウロの語った三つ目のことになる。22, 3節。「このようにして、私は今日に至るまで神の助けを受けながら、堅く立って、小さい者にも大きい者にも証しをしています。そして、話してきたことは、預言者たちやモーセが後に起こるはずだと語ったことにほかなりません。すなわち、キリストが苦しみを受けること、また、死者の中から最初に復活し、この民にも異邦人にも光を宣べ伝えることになる」と話したのです。」

パウロの生涯は波瀾万丈です。伝道旅行の途中いろいろな目にありました。船が難破して海を漂う、盗賊にあう、偽の兄弟にだまされる、裸にさ

れて寒さに震える、飢えに苦しむ。そして最後はローマで処刑されたと言われる。将来はパリサイ派のリーダーとなることが約束されていたエリートが、イエスに出会うことによって、それまでの名誉や将来の約束を捨てて苦しみの道を歩んでいくのです。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 罪の赦し

どうしてそんなことができたのでしょうか。パウロが人一倍熱心な信仰者だったから。やはり生きている主と出会ったというあのダマスコ途上の経験を抜きにしては考えられない。それまでパウロは神ということばは、旧約聖書を学んで知識としては知っていました。ところが主イエスの御声を聞いて、彼は初めて神に出会い、知識ではなくて体験として神を知った。聖書が何を語っていたのか初めてわかった。人は死んで終わるのではない。

もう少し細かく言えば、そのときパウロに何が起きたか。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」これを聞いた時、パウロは自分がこれまでしてきたことを自分の目で見なければならなくなる。神を愛すると口で言いながら、神を迫害し、教会を迫害していた。それはとんでもないことで、いますぐに殺されても文句が言えないほどの罪を犯してきた。ところが主は罪を赦してください。そればかりでなく、こんどはユダヤ人にも異邦人にも悔い改めによる罪の赦しと復活のいのちを伝えるようにと、新しい召しを与えてくださったのでした。

### 2) 死からのよみがえり

私たちは、これまで罪の赦しとからだの復活のことを別々のこととしてとらえていたかもしれませんが。でもこうして見てくると、パウロにとって罪の赦しと死からのよみがえり、この二つはばらばらのことではなく、最初から全部つながっていて、切り離すべきものではないことがわかります。だからパウロはキリストの死と復活を伝えるのだとはっきり言う。

私たちはパウロのような劇的な神との出会いはおそらくないでしょう。主は死んだ者をもよみがえらせてくださると聞いても、信じ切れていないかもしれない。それでもよいのです。それでも主は励ましてくださる。私たちの罪が赦されているのなら、私たちは死んだとしても必ずよみがえりのいのちをいただく。やがてそのことがわかるようにと導いてくださいます。

私たちの信仰の大先輩たちもそうやって導かれ、神の国にあこがれながら地上の生涯を歩んでいきました。この先輩たちを導いてくださった主の御名をあげ、私たちも天の御国に迎えられ、ともに励まし合ってまいります。